

董其昌の書論

中田 勇次郎

書を論ずることは、漢代にはじまり、魏晉南北朝におよび、齊梁には書の品第論が流行して一時に栄え、ついで唐代に及んだ。張彦遠の法書要録はこの間の書論を大成したものである。天宝の末・安史の乱を境として革新的な書が興起してからのこの書論は、ようやく北宋の歐陽脩、蘇軾、黃庭堅によって実を結び、米芾によってさらに洗鍊を加えた。これらの北宋の諸家の書論は、張旭・懷素や顔真卿を主導者とする唐の革新的な書の理論づけをなしたものであり、これによって、かれらの評価はより以上に高まった。北宋の書論をもっともよく反映したのは明代であり、明代において唐以来の革新的な書の書論を承けて、新しい幟旗をうち立てたのは、何と云っても董其昌を第一としなければならない。

董其昌（一五五五—一六三六）字は玄宰、号を思白または香光という。松江華亭の出身である。官は天啓年間に礼部侍郎にまで至っている。詩文書画よくせぬものはなく、とくに書画において名のあることは今あらためて説くまでもない。ここではかれの書について、その古今の名蹟を鑑賞した題跋を通して、その理論がどのようなものであったかを見ようとおもう。かれの詩文集には「容台集」があり、その別集六卷の卷四、五に「書品」と題して多くの題跋を集録している。別にまた「画禅室随筆四卷」があり、この卷一にも、論用筆、評法書、跋自書、評古帖の四項を設けて、その書を論じた跋文のたぐいを載せている。一部分、容台集と重複するところもあるが、画禅室随筆の方はまた、容台集に見られぬ部分もあって、併せて役立つところが多い。今、この二本を参考して、董其昌の書論を、原跋を解釈しながら見てゆこうとおもう。

画禅室随筆のなかに、かれの学書の経歴を述べた一節があるので、まずはじめに、かれの学書のことから見てゆこう。それには次のように書かれている。

「私が書を学んだのは十七歳のときである。これよりさき、私の家の仲子伯長、名は伝緒は私と一緒に郡の試験を受けた。郡守をしていた江

西の人、衷洪溪が、私の書がまずいので第二位に置いた。これ以来、はじめて発憤して習字するようになった。はじめ、顔平原（顔真卿）の多宝塔を師とし、また、改めて虞永興（虞世南）を学んだ。考えてみると、唐の書は晋魏に及ばないので、遂に黄庭経、および鍾元常（魏の鍾繇）の宣示表、力命表、還示帖、丙舍帖に倣って、およそ三年をへた。自分の思うことには、古に逼（せま）って、もはや文徵仲（文徵明）、祝希哲（祝允明）を眼中に置かないのがよい。しかし、書家の神理においては、実はまだ悟入するところはなかった。ただいたずらに格轍（形式）を守るだけではじめて従前は妄りに自分で目標を立ててそれでよいと思っていたことを悟った。それはあたかも香巖和尚（きやうげん）が、一たび洞山の間を経て、却つて一生、粥飯僧となることを願ったかのごとく、（香巖が洞山の良价に参した故事）自分も筆硯を焚（や）きすててことを願った（文の人に及ばぬことを恥ぢて筆硯を焚きすてて、文をつくらぬことゝの故事）。こうして、これからの次第に少しずつ会得して、今に二十七年になろうとするが、猶お波浪のままにただよう書家となっている。翰墨は小道（唐太宗が、学書は小道なり急務に非ずといった）であるが、その困難なことはこのとおりである。まして、道を学ぶとなればなおさらのことである。」

これは十七歳から二十七年というから、万曆二十五年（一五九七）のころの跋である。

かれが書を学んだ経歴を告白している記事は容台別集にもある。それにはこう述べている。

「私は十七歳のとき書を学んだ。二十二歳のとき画を学んだ、今は五十七歳である。（万曆三十九年、一六一一）しかし、謬（あやま）って私を称許するものがある。私は自分でよく比較し考えてみるに、米顛（米芾）が人を欺く言葉を作ったのに似ないようにしたいものである。一たい、画では文太史（文徵明）と較（くら）べて、それぞれ長所短所がある。文氏の精工にして、体を具えている点は、私の及ばないところである。しかし、古雅秀潤という点になると、私の方がさらに一籌を進めている（すぐれている）。趙文敏（趙子昂）と較べてみると、それぞれ長所短所がある。行間が茂密で、千字一同である点では、私は趙に及ばない。しかし、歴代の名蹟を臨倣している点では、趙は十のうちの一を得ているが、私は十のうち七つを得ている。また、趙の書は熟に因って俗態を得たが、私の書は生（熟に對することば・なま）によって秀色を得ている。趙の書には作意しないものはないが、私の書は往々にして率意にかく。作意という点については趙の書はまた私に一籌を輸する（負けること）ものである。ただ私は（全然作意しないというのではなく）作意することが少いだけのことである。古人は云っている。『右軍（王羲之）は、張芝が池

に臨んで、池水がごとく黒くなったというが、もし自分がこれほど書に耽ることができるならば、もとよりかれより勝れるにちがいない』と。私が趙に対するのも、これと同様である。米老（米芾）は云っている。『私の書には一点の右軍の俗気がない。私の画には一点の李成、関仝の俗気がない』と。しかし、世間の人は終に之を許さないのである。私が自分で批評するところは、ちょうど児を憐んで醜なるを覺らないのに似ているのを恐れるのである、』と。

董は趙をきわめて排斥していることは、かれの記している文の随所にうかがうことができる。趙の作意をにくみ、それに対して率意であることを書の肝要な点であるとしている。作意の書は俗であるとするのである。右軍の俗気というのは、唐の韓退之あたりから出ている説であるが、これは唐代以降になって因襲化した伝授書道における王羲之の通俗な低調さをいったので、さかのぼって晋人の高い風韻をさして言ったのではないとおもわれる。董の書は歴代の名蹟を臨倣することによって得られた率意の風韻を重んずるものである。

趙子昂とはよほど意見が合わなかったらしく、かれに対してまた同様のことをのべている。

「私は書においてはただちに趙文敏（子昂）に接くことができるようである。ただ、すこし生（なま）なだけである。そして子昂の熟したところは、また私に秀潤の気があるのには及ばない。ただし、私は多く書をかくことができないので、この点では呉興（趙子昂）に一籌を譲る。画では（趙は）体を具えて微妙である。要するにかれは三百年來の一具眼の人である。」

趙の難点を指摘しながらも、その長はよくみとめている。

かれは趙子昂との相違を説くことによって、よく自分の書の立場を明らかにしている。

「邢子愿侍御（明の邢侗、侍御は官名）はかつて私のためにこう言ったことがある。『右軍（王羲之）ののちは、趙文敏（子昂）を法嫡（正統な後継者）とすべきである。唐宋の人々はみな旁出（支流）にすぎない』と。これは篤論ではない。文敏（子昂）の書の欠点は、勢のないところにある。かれの学ぶところの右軍（王羲之）はなお形骸の外にある。右軍の雄秀の氣象は、文敏には得られていない。どうしてよく山陰（王羲之をいう）の武（あつ）を接（つ）ぐことができようか。」

これは邢侗が趙子昂を王の正統な後継者としたのに対する反論であり、趙は王の形骸のみを取り氣象を備えていないことを非難したのである。

かれはつづいてまた、趙の書をこう評している。

「古人が書を作るには、からず正局を作らない。というのは、奇を以て正としているのである。これが趙吳興（子昂）の晋唐の室にはいらないわけである。蘭亭序の書は、正しくないのではない。その縦宕（放縦でおおまかなこと）の用筆のところには、跡の尋ねべきものがない。形だけ模して相似ているのでは、去れば去るほど遠くなる。柳公権が筆正し（心正しければ筆正し）と云ったのは、よく柳下惠を学ぶものにしてはじめて参（ま）ることが出来るものである。（柳下惠は孟子に見える）。私は書を学ぶこと三十九年にして、はじめてこの意（こころ）を理解することができたのである。」

十七歳から書を学んだというから、これはそのち三十九年といえ、万曆三十七年（一六〇九）ごろの跋文である。趙子昂が晋唐の室に入らなかったのは、形似にとらわれて心を忘れたからだとしている。

かれが書をかく態度はいろいろなことばで説かれている。次に、

「私は書において臨倣（しんぼう）しないものはない。もっとも得意とするのは小楷書にある。しかし、筆をとるのが面倒なので、ただ行草だけが世間に行われているのである。また、たいてい作意の書ではなく、ただ、率爾に酬應（しうおう）するだけである。もし、その出来のよい作ということになると、とても晋魏（一に晋宋に作る）に追跡することはできないにしても、断じて唐人の後乗にはならないとおもう。」

という。かれが率意の書をよいとする説は、小楷を説く場合にもあらわれてくる。率意というのは、もちろん作意に対することばで、作意の悪例としてかれの頭のうちに浮ぶのは、つねに趙子昂である。その目標は魏晋にある。しかし、魏晋までは追隨できないかもしれないが、唐人には劣らないつもりであると、大きい意気（いき）ごみを見せている。

かれはまたこのように言っている。

「私は生れつき書が好きであるが、儀式ばってわざわざと書くのが面倒くさいので、一篇の作を完全に書きあげるとはめったにない。一日として筆を執らない日はないのであるが、みな縦横断続して、順序のないことばを書くだけである。たまたま冊子を机案のほとりに置いておいたのを、とうとう取りあげて各体の書をかいた。その上、古人の雅致のある言葉を多く録した。今まで意の向くがままにしていたのは、敬意をつくした道ではないことに気付いた。しかし、私は書名（書によって名をえること）を好まない。だから書の中には淡泊な意趣がある。このこ

とはまた自分でも知っている。前人が書をつくるのに苟かりそめにしないなどは、名のためにそうしていると言われても仕方がないとおもう。」

董其昌の書卷には、古人のことばを、淡々として何の意図もなく、漫然と書いている例がよくある。何かむかしの名篇の詩を立派な字で書いて人に誇示しようとするようなものではなく、自然に意の向くがままに文をえらんで、何げなく書き下しているのである。この跋をよむと、そういうものを書いている気持ちがよく理解される。

しかし、かれの知友の陸儼山（陸深）が、書をかくとき、率尔には応酬しても苟かりそめ且には書かず、つねに「敬を用うる」ことを忘れなかったことを、董は感服して記している。書をかくのに、いかに率尔に書いても苟且ではなく、敬虔さをもって書くべきことを自ら戒めている。次にまた「私は書を学ぶこと三十年にして書法を悟ることができたが、それを実証することができないのは、自ら起し、自ら倒れ、自ら収め、自ら束ねるところに在る。この関門をとり過ぎれば、右軍父子でさえもいかんともすることはできない。左に転じ、右に側かたむく。これが右軍の字勢である。いわゆる跡は奇に似て反って正しいものであり、世人には解することができないのである。」

かれは説明することのできない技巧をもっている。それは妙悟によって体得されるもので、一つ一つの技法を云々するのではない。ただ、正しい書法で正しい形の字をかくのではない。王羲之の字も左に転じ右にかたむいてゐる。奇なようで正しいというのが、普通の人々は難解であるが、妙悟することによって得られるとするのである。

「書道はただ巧妙二字にある。拙であれば、直率にして化境（自然の境地）がない。」
という。この巧妙な妙悟によって到達されるのである。

「書を作るのに、もっとも忌むのは、位置が等匀（一定の間隔におかれて変化自由のないこと）であることである。その上、一字の中にも、収斂があり放縱があつて、精神がたがいに挽ひきあうところがなければならぬ。王大令（王献之）の書は、左右、頭を並べているものがちっともないし、右軍（王羲之）の書は鳳の翥り鸞の翔るがごとくで、奇に似て反って正しい。米元章（芾）が、大年の千文には偏側の勢があり、二王の外に出ているのを観ると謂っているのは、これはみな布置が平均であつてはならず、長短が錯綜し、疎密が相間まじわっていないからならぬことを言っているのである。」

これはおなじく「奇に似て反って正」の説をといっているのである。宋の蘇東坡が初唐の楷書は算木のようなものであるといつて、その機械的な単調

さを排したのと同じく、ただ規則的に定規で線をひいたように筆画を等間隔でならべるような書を嫌ったのである。

王献之の蘭亭帖を批評したことばにも、

「この巻は用筆が蕭散であって、字形と筆法とが、あるいは正しく、あるいは偏り^{かたよ}、いわゆる、右軍の書が、鳳翥^{かたよ}り鸞翔^{かたよ}るがごとくであって、跡は奇に似て反って正しい。いままで黄庭経や聖教序（集王聖教序）を学ぶものは、そのことをよく理解しないで、ついに一種の俗書と成ってしまう。かの古人に倚藉^{よき}して、自分で轍に合したと思っても、ちょうど油が麵のなかにはいったように、雑毒が心にはいりこむ。こうして、前代の諸公に累^{つらなり}を与えたことは少くない。私はそれゆえに、とくにこのことを取りあげて、書家にはおのずから正法眼蔵があることを知らしめるのである。」

これもまた「奇に似て反って正しい」という説をいたものであり、かれの王羲之のとり入れかたは、蕭散自然のすがたであり、それがほんとうの正しい文字のすがたとするのである。かれが楷書では、黄庭経や樂毅論を取ったのも、晋人の小楷は規則的な筆法や結体にとらわれないで、大小斜正、長短さまざまに、自然な変化を示しているからである。また、黄庭、樂毅にも、いろいろな帖があるが、その中でも晋人の自然の韻致のあるものを取っていることも、その諸跋によって知られるとおりである。たとえば黄庭経では思古齋帖というのをたいそう称賛しているのも、この帖はこういう自然の風神がすぐれているからである。

かれはまたこう言っている。

「古人は書を論ずるに章法を以って一大事とした。これはいわゆる「行間茂密」（魏の鍾繇を批評することば）がこれである。私は米癡（米芾）が小楷で西園雅集図記をかいているのを見た。これは紈扇の書で、その直なることは弦のようである。これはかならず、象迹（根拠となる筆跡であろう）があるのではない。これは平日、章法に留意しているからこんな風に書けるのである。右軍（王羲之）の蘭亭叙の章法は古今第一である。その字はみな左右映帯して生じている。あるいは小さく、あるいは大きく、手のゆくがままにかかれて、それがみな法則になっている。だからこそこれが神品なのである。」

ここに見られるのは章法の自然さである。作意のない章法のうちに、自然の風神があらわれることであり、これは形は奇のように見えても実はそれが正しいのである。

かれの書の重点が「奇に似て反って正し」であり、「奇を以って正となす」であることは、以上の諸跋によって明らかである。そこで、その目標とした書はどこにあったかを見ると、次の跋に、

「書家は好んで閣帖（宋の淳化秘閣法帖）を観る。これはまさに弊害である。というのは、王著（閣帖の編者）の輩は、ちっとも晋唐の人の筆意を識らない。もっぱらその形似を得るだけである。それゆえに正局の字が多い。字というのは、奇宕瀟洒で、時に新しい致趣を出し、奇を以って正と為し、故常（あたりまえの普通のもの）を主としないようにすべきである。これは趙吳興（子昂）の未だかつて夢にも見なかったことであり、ただ、米癡（米芾）だけがよくその趣を会得している。今、王僧虔・王徽之・陶隱居、大令帖の幾種かを宗としなければならぬ。そのほかのものはみなかならずしも学ばなくてもよい、」という。

その奇を以って正と為すことの目標は、趙子昂を排し、米芾におかれていることがわかる。古人の書では齊の王僧虔、王羲之の子、徽之、梁の陶弘景と王献之をあげている。王僧虔は閣帖に兩啓と万歳通天進帖に太子舍人帖があり、いずれも正書である。蘇東坡がこれを学んだなどと言われることもあるように、一種の自然な風韻を帯びた書である。王徽之は閣帖に得信帖があり、万歳通天進帖に新月帖がある。一は草書、一行書であるが、その瀟洒逸脱した書風は、よく父羲之を承けている。陶隱居は文氏の停雲館帖に茅山紀事がある。華陽隱居真蹟帖と題する行楷書であり、やはり自然の風韻を帯びている。王献之は大半淳化閣帖に見られる。王羲之よりも放縦であり媚趣が備わると評されているように、蕭散さは一そうすぐれたものがある。これらの書に共通するものは、一種の逸脱した自然の韻跋であり、董が奇を以って正となすとして古人に求めているのは、このようなものをさすことがわかる。

かれが書の学ぶべき目標としたのは晋唐にあったが、晋と唐とはまたおのずから差がある。かれの目ざしたのは晋の韻（ひびき）であり、唐またはそれ以後の書も、晋の韻をうることに窮極的な目標があった。そのことをかれは次のように論じている。

「晋人の書は韻を取る。唐人の書は法を取る。宋人の書は意を取る。ある人は、意は法より勝っているのではないかというが、そうではない。宋人は自らその意を以って書を作るだけである。古人の意があるのではない。しかし、趙子昂は宋の弊害を矯正し、己の意などは用いなかった。これは宋人ならばかならず訶めるところであろう。それは（趙が）法の転ずる所となっているからである。」

晋人は韻をたつとび、唐人は法をたつとび宋人は意をたつとびという説は、このち清代の書論家のとりあげて論ずるところの根柢となる説

で、書の時代性を論じた卓説である。ただ、意といっても、宋人は古人の意を取ったのでなく、自らの意、いわば個性を主んじたのであるとし、元の趙子昂は宋人の個性をたつと弊をのぞいたが、また法に陥って形式主義となる。董はその他の跋語に多く記しているように趙子昂を極力非難している立場にある。よって董の求めているのは晋韻であることが了解される。王書の伝統は唐代になって伝統の弊害を生じて、伝授秘訣の形式に陥るが、宋の蘇軾、黄庭堅、米芾に至って、晋人の韻の中から新しい書の革新を導き出している。董はその晋韻の説を承けて、晋人の書の中から新しい道を求めようとしている。

かれは晋と唐の比較を、また一跋に、次のように述べている。

「唐人の詩律とその書法はすこぶるよく似ている。いずれも穠麗を主として、古法からはようやく遠ざかってきている。私はいつも思うことに、晋の書には門がなく、唐の書には態がない。唐を学んでこそ、よく晋に入ることができ。晋代の詩は、その書のようなものである。陶元亮（陶淵明）の古淡、阮嗣宗（阮籍）の俊爽さは、書法の中にあつては、虞（虞世南）や褚（褚遂良）の対抗できるものではないのは、晋は『門が無い』からである。因って唐人の詩を写かいてこのことに言い及んだ。」

という。書と文学は盛衰の上からはかならずしも同一歩調ではないが、性質の上からは類似点が求められる。晋の書には門が無いという。老子の「大道無門」をにおもわせる言葉である。法によって入ることのできるものではなく、晋韻を妙悟することによってはじめて得られる。唐の書に態がないという、態は情意をいうようである。晋の書には韻致があるが、唐の書にそれがないことを、ここでは謂っているのであろう。かれの書論を見ると、その重点となつてゐるところが以上のようなことがよくわかるが、しかし、かれの書の鑑賞はけつして片寄ることなく、晋の二王から元の趙子昂に至る諸名家の書をことごとく深く鑑賞している。このことは、かれみずからこれらの諸名跡を集めて刻した戲鴻堂帖によって知られる。多くは真蹟の墨本を見たものについて刻し、それぞれにその鑑賞記を跋にしている。

今、戲鴻堂帖にとりあげられている書人を時代順に列挙してみると、

晋 王羲之 王献之 謝安 桓温 王操之 王献之 顧愷之 楊義和

宋 謝莊

隙 智永

董其昌の書論

董其昌の書論

唐 唐太宗 唐明皇 歐陽詢 虞世南 褚遂良 陸柬之 薛稷 懷仁 裴輝卿 鍾紹京 孫過庭 胡英 李邕 徐浩 顏真卿 柳公權

張旭 懷素 高閑

五代 楊凝式

宋 蔡襄 蘇軾 黃庭堅 米芾 薛紹彭 李伯時 吳傳朋 朱熹

元 趙子昂 鮮于樞

右のとおりである。これはほとんど法書の対象となる名家を尽していると言ってよい。かれが排斥したのは人ではなく書であったことは初唐の欧、虞、褚の楷書の名家からも、その佳い書を取りあげているし、趙子昂はもっとも非難をあげかけた書人であるが、この書は大量に収めている。趙の小楷などは口をきわめて称賛している。とにかく名蹟であればうけ入れるという広い度量をもって鑑賞し、ただ、むやみに排斥したのではないことはこれらの内容からも了解される。

かれの書論の中で、中心となって論ぜられるのは晋の二王、唐では顔真卿、宋では米芾であり、その流れの中からとり出しているのは、かれの平淡自然の精神であり、趙子昂はきわめて対照的に、かれ自身の書をかえって意義づけるように論じられている。

かれの生涯の中には、数多くの名跡を鑑賞しているが、その中でとくによくかれの心をひきつけたのは王羲之の官奴帖、一名玉潤帖である。それについては、かれはいくたびか跋をしたため、縷々この書の佳いところを論じている。この官奴帖のことを記した諸跋は、もっともよくかれの意向を知ることのできるものであり、以上にのべた晋韻の理論の生れでるについても、このような経緯を知る必要がある。

次に官奴帖に関する諸跋を見る。

「右軍の官奴帖は五斗米道に事える上章の語である。己卯の秋、私は留都に試験官となっていたとき、この真跡を見た。これは唐の冷金箋に摹写したものであった。これを見たために、筆を閣いたまま、書をかかないこと三年であった。」

これは王羲之の官奴帖に記した跋語である。己卯の秋は万曆七年（一五七九）董其昌は二十五歳にあたる。官奴帖は玉潤帖ともよぶ。宋の米芾がたいそう称賛している王の行書の一つである。米の書史には次のように記している。

「王羲之の『玉潤帖』は唐人の冷金紙上に双鉤した摹帖である。その帖のことばに、

『官奴小女玉潤。病来十余日。了不令民知。昨来忽発瘡。至今転篤。又苦頭癰。頭癰(以)已潰。尚未足憂。瘡病少有差者。憂之焦心。良不可言。頃者艱疾。未之有。良由民為家長。不能克已勤脩。(勉)訓化上下。多犯科誡。以至於此。民唯婦誠。待罪而已。此非復常言常辭。想官奴辭以具。不復多白。上負道德。下愧先生。夫復何言。』という。

この帖は稚恭帖の後に連なっている。文字の大きさは蘭亭序と同じである。その真跡は神妙なものであらうと想う。とある。この帖は、米芾の宝章待訪録にも

「王右軍玉潤帖、右、蘇州教授、閻丘籲云う、承議郎建安の王寔の処に在り、古跋がある。装書人(表具師)に装背せしめたところ、久しく返還しないで、その上、跋の半ばを剪りとった。皆、唐の名公の跋である。云々。」

という。この方は何も記載はないが、唐の名公の跋があるというから、真跡本らしい。

玉潤帖は今、古いものでは、宋拓宝晋斋法帖に刻されているものが、米芾所見のものと見てまちがいはない。おそらく唐摹本の方のものであらう。行書十一行から成る。董其昌の戲鴻堂帖に刻されているのは、これと同一のものであらう。このほか二王帖には宋の淳化秘閣統帖に依って模刻されている。明代の集帖では戲鴻堂帖のほか、欽岡齋帖、玉烟堂帖、快雪堂帖などにも刻されている。欽岡、快雪は墨書した摹本に依っているであらうが、筆画に異なるところがあり、二王帖、宝晋斋の方がよくできている。明の末葉には、まだこの摹本が伝来していたものと見える。これと同一の巻にあった稚恭帖というのは、今、明初の東書堂帖に刻されているのによって知られる王の尺牘帖である。米芾が、天下法書第二、右軍行書第一として称賛しているものである。玉潤帖も稚恭帖とならぶ王の行書帖として、最高の位地に置かれている作であることは想像に難くない。

この尺牘の内容は、官奴(すなわち王献之)の娘の玉潤が病気をしたのを、当時の医師の役割をつとめていた道士に訴えたものである。そのときの習慣として、道上に訴えるときには、かならず自分の犯した罪を懺悔する言葉を道士に進上する。それが上章語である。五斗米道というのは、漢の張陵のはじめた道教の一種で、この道士について学ぶとき、五斗の米を提出するので、この宗教はかく五斗米道とよばれる。その方法は一種の祈祷によるものらしく、服罪の上章語を三通道士に差し出すと、道士は一通は天にたてまつるので山上におき、一通は地に埋め、一通は水に沈めて、これを三官手書と称したという。これを祈祷して快癒せしめるというのである。この尺牘も、王羲之が孫娘の病氣のために道

士にさし出したものと解釈される。

これを行書でかいているのは、書体の上において、尊上には楷書を用いる。たとえば王羲之が帝王にさしだした霜寒帖というのは正楷であり、普通の対等の関係の存問にはくだけた行草体を用いているのによって知られるように、ここは道士に対するものであるから、つましい正しい行書を用いたものと思われる。書がよく書けているのは、一つには道士にたてまつるというので、つつしんで書いたからであろう。

董其昌がもっとも力をそいだのは行書であり、そのかれが三年間、筆において書を書く気になれなかったという感銘のほどがうかがわれる。今は、刻帖によってしかその書を鑑賞することができないが、比較的古くてよい刻帖を見るよりほかはない。かれはまたいう。

「書法は藏鋒を貴ぶけれども、模糊（ぼんやり）としたあいまいな筆法を藏鋒とおもってはならない。用筆は太阿（古の名刀の名称）の名刀の刺截（ずばりとよくきれる）の意のごとくでなければならぬ。それには勁利を以て勢を取り、虚和を以て韻を取らなければならない。顔魯公（唐の顔真卿）のいわゆる『印、泥に印す』のごとく、『^{きり}錐もて沙に画す』のごとし、というのがこれである。つぶさに玉潤帖を参考すれば、思い半ばに過ぐるであろう」と。

書の上で藏鋒というのは、露鋒に対することばで、筆鋒を外にあらわに出さないで、線の中に藏することをいう。筆鋒が線の中を通るように書くことを意味することばで、古法はこれによって書かれたとする。王羲之など晋人の伝えた古い書法として知られる。

董其昌は、この古法の藏鋒をとりあげて、藏鋒というのは、「模糊を以て藏鋒と為すを得ず」といって、ごまかしであってはいけない、筆勢の勁利さと、韻致（書の風韻、ひびき）の虚和がなければならないとする。顔真卿のことばとして、印章を泥（粘土）の上におすとき、印文の筆画が正しくもり上って中心のすじが通る。沙の上に錐で線をかくとき、左右に片寄らないでまっすぐ中心に線がとおるのと同じであるという。その実例に上げているのが、この玉潤帖の書である。

王の書が藏鋒であることは、今、伝わっているもともとたしかな喪乱帖や孔侍中帖を見てもわかることで、玉潤帖というのも、真跡は伝わらないし、墨書した双鉤本も見られないが、刻帖を習うときには、この藏鋒の説をよく味わう必要があるとおもう。

藏鋒については、かれはまた次のように言っている。

「唐人の書は、みな廻腕宛転して藏鋒する。よく筆を留^{とど}めることができ。直率に流滑しない。これが書家の相伝の秘訣である。書法がそ

うであるばかりでなく、画家の用筆もまたこの意を得ていなければならない。」

画禅室随筆には、この文のちに、さらに次のことばが加えられている。

「この帖はのちに婁江の王元美（世貞）に帰した。私は己丑（万曆十七年、一五八九）、之を王澹生に詢うと、すでに新都の許少保（許国）に贈られた。この帖は禊叙（蘭亭序）に類している。因って背臨してこのことに言い及んだ。」

これによると万曆十七年以後の跋ということになる。

「十有三日、洙涇道中を舟行し、日ごとに蘭亭およびこの帖を書すること一過した。官奴帖の筆意を以って禊帖（蘭亭序）を書すれば、とりわけ正しい門の入りかたとすることができ。」

「趙吳興（趙孟頫）の蘭亭序は丙舎帖（墓田丙舎帖）、王羲之の臨書した魏の鍾繇の書」とたいそうよく似ている。官奴帖は丙舎帖とまた一家の眷属である。」

官奴帖はやはり玉潤帖のことで、その行書の体は蘭亭序と同類のものであり、官奴帖の筆意で蘭亭序を書けば、もっとも正統な学び方であることを説き、また、鍾繇の墓田丙舎帖をも同じたぐいとする。

十有三日の一条は、画禅室随筆では、「臨官奴帖真蹟」跋の後につづいている。日付けは「戊申十月十有三日」とあり、同時の跋となっている。

「この帖（玉潤帖、一名官奴帖）は、淳熙秘閣統刻にある。米元章（芾）のいわゆる『はなはだ蘭亭叙に似たもの』である。かつて私はこの帖を南都で見たことがある。かつてその筆法を米帖に記して、『字々竊慕、勢は奇にして、反って正しく、藏鋒裏鉄、遒勁蕭遠、これを神を伝うと為すに庶幾し』といっことがある。この帖は聞くところによると、上海（一に海上に作る）の潘方伯の得るところとなったそうである。またのちに、王元美（王世貞）に帰した。王はこれを私の座師（試験官）の新安の許文穆公（許国）に贈った。文穆公はこれを少子胄君に伝えた。ある一人の武官がこの帖を借観して、これを転売してしまった。今、吳太学用卿（吳廷、号余清斎）の所蔵となった。ちかごろ、吳門においてこの帖を出して私に示した。そこで私は二十余年の積りつもった想いを快くとげることができ、ついにこの本を臨したのである。そもそも私は二十余年前、この帖を書いて、ここに今、真跡に對うことができ、豁然として会得するところがある。これは、漸修頓証、一朝一夕に会得

したものではない。たとい、その当時、それをするだけの力があり、苦心懸念を経なかったとしても、かならずしも真実を契していたとは限らない。懷素（唐僧）のことばに、『心胸を豁然（一に豁焉に作る）とし、頓に凝滯を釈く』（懷素の自叙帖のことば）、と云ったのは、今日の私の心境の意味である。時に戊申十月（万曆三十六年、一六〇八、五十四歳）。」

この一条は画禅室隨筆には「臨官奴帖真蹟」として載っている。さきの万曆七年に書いた跋のち二十余年を経過し、万曆三十六年（一六〇八）五十四歳でふたたびこの跋を書いている。二十年間、心の中に沈潜して、次第に成熟した意趣が、この年月の間に漸次悟得されて、この時になってはじめてこの帖の妙味を悟るに至ったという記録である。董の書は平淡自然をその精神とし、妙悟によってこの境地に至ることを最上としている。このことは、この一跋でよくあらわれている。

官奴帖のほかに、もう一つかれに深い印象を与え、その書学の資となったものに、おなじく王羲之の「行穰帖」がある。これについてもかれはいくたびか跋をしたためている。ここにもかれが一つ法書に対して、どのように鑑賞していたかをよくうかがうことができる。

「右、私はちかごろ王右軍の行穰帖を購入した。この帖のことは、宣和書譜に載っている。かつて蘇東坡が送梨帖に題したことを憶い出す。それは『家雞野鷲、同に俎に登る。春蚓秋蛇、総て奩に入る。君家の兩行十三字、氣は鄴侯の三万錢を圧す』というのである。私の家の行穰帖の十五字も、坡公（東坡）が見たらさらに粧点（お化粧して美しくすること）されるにちがいない。彦直（前彦直）が私に書を索めた。因ってこの帖を臨してこれに贈った。古人の用筆は疎（まばら）なようで実は密（こまやか）である。これはちょうど環に端がないようなものである。私のこの書は、黃庭經と案毅論（ともに王羲之の小楷）に倣ってかいた。かなり右軍の遺法を得ている。しかし、いわゆる鳳翥鸞廻（ほうしうらんかい）というのには、どうも該当するところではない。」

王羲之の行穰帖を手に入れて、それを臨書したのちに加えた跋語である。行穰帖は王書の搨摹本であり、この本は今も伝わって、現在は日本にあるという。明代には董其昌が所蔵していたことは、この記事によって知られるが、明の集帖、呉廷の余清斎帖にも刻されている。

蘇東坡の送梨帖に題した詩は、送梨帖を称賛したものであるが、はじめに家雞野鷲と云っているのは、南朝末の王僧虔の「論書」のなかにあることばを用いたのである。それは、庾征西翼（庾翼）の書は、少時、右軍と名を斉しくした。右軍はのちになって書が進歩した。庾は猶（なほ）お忿（うらやま）まなかった。庾が荊州に在って、都下に与えた書簡に、小兒輩（こどもたち）は家雞を賤（いや）しみ、野鷲を愛して、皆、逸少（王羲之）の書を学んでいる。私が荊

州から返ってからのち、二人の書を比べよう」と云った。とある。家雞は庾翼をいい、野鷲は王羲之を指してたとえている。家雞、野鷲はどちらがよいとも云えないものであり、この詩では晋人の名跡をさしていつている。春蚓秋蛇は晋書の王羲之伝の伝賛のなかに、梁の蕭子雲の書を悪評したことばである。東坡の詩ではやはり古人の筆跡の収蔵が色々あることにたとえている。そして、あなたの送梨帖の十三行はとくによいと称めているのである。鄭侯は唐の李泌のことで、藏書の多数で知られた。韓退之の送諸葛覺往随州讀書詩に「鄭侯家多書、挿架三万軸」という。「鄭架」ということばの故事でも知られる。籤は書卷の見出しに軸頭につける札のことである。この李泌の藏書を圧倒するばかりというのがこの詩の意味である。そこで、行穰帖も蘇東坡が見たならばさらにもっとこれ以上の賛辞を惜しまなかったであろうというのである。ただ、この送梨帖というのは、宋拓宝晋斋法帖では王羲之の書としているが、後には王献之の書とされる。戲鴻堂帖にも王献之の書として刻されている。

この書というのは、臨書ではなく跋の書をいうらしい。董のこの跋の書は小楷で書いたようで、黄庭経や楽毅論に倣って書いて、右軍の遺法を得たと云っている。董は楷書はあまり書かなかったが、関心はもっともよく寄せていた。そのことは自分でも記している。董の書は行書を主として鑑賞されるが、楷書にも十分注意を払うべきである。

この跋のおわりに、鳳翥鸞廻とあるのは、唐の張彦達の法書要録に収めた唐朝叙書録のなかに、唐高宗の書を称して、「魏晋以後はただ二王だけを称している。しかし、逸少（王羲之）は力が多くて妍美さが少なく、子敬（王献之）は妍美さが多くて力が少ない。今、聖跡（唐高宗の御書）を観るに、二王を兼絶し、鳳翥かり鸞廻めぐる、実に古今の書聖である」とあるのがあるいは基ずくところであろう。

ここにはわずかに二帖の例をあげたが、すべての法書について、多少の差はあっても、深い鑑賞が行われていたことは、この例からも想像されよう。かれがとくに重点をおいたものには、王書のほかに顔真卿と米芾があり、それに関する諸跋にもよくその主張するところの論旨が説かれている。しかし、かれの説くところは要するに平淡自然の精神であり、これは妙悟によってはじめて到達しうることである。その妙悟は、ことばの外にあるものであり、説明だけによって了解されるものではないとする。

かれは革新派の書論を打ち立てたとされるが、かれの対象としたのはすべてのすぐれた書にわたっており、二王の書においても、その因襲的な形式化した伝授秘訣の書法ではなく、ただちにその核心に触れて、晋人の風度から生ずる「韻」をとり出していることがとくに注目される。

董其昌の書論

伝統というものは、その初めて起ったときには生新なものであり、その生新さのなかにあるものを取り出すのが革新派の務めであり、董其昌の書論ではよくその務めを果しているあとをうかがうことができる。